

## 中古文学会関西西部会第五十八回例会 発表要旨

一 『源氏物語』夕顔巻の「蟬の羽」の歌について― 『後撰集』の「うつせみのから」より「夏衣」へ―

京都女子大学(研) 朝日 眞美子

夕顔巻の空蟬の歌「蟬の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても音は泣かれけり」について、蟬と「夏衣」との関係、男性から衣を返された時の女性の歌という二点に着目して考察する。前者については『拾遺集』(巻二、夏)の大中臣能宣の歌、後者については『後撰集』(巻十二、恋四)の源巨城の歌との関わりを、諸注指摘している。本発表は研究史をふまえつつ、蟬についての和歌や漢詩を視野にさらに検討を重ねて、この歌の解釈を試みる。

二 涉成園の偶仙楼をめぐって

立命館大学 川崎 佐知子

頼山陽撰涉成園十三景の偶仙楼には、和漢六詩歌仙板額が掲げられていた。十二枚は近衛家熙筆渡辺始興画の六詩仙および新六歌仙からなり、家熙の価値観をうかがい知る材料ともなろう。近衛家と東本願寺の関係に留意し、板額が作成された背景の一つに元文四年(一七三九)の家熙女入興があらうことを申し述べる。